

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3270101458		
法人名	医療法人 街道会		
事業所名	グループホーム あした葉 1F		
所在地	島根県松江市雑賀町299番地		
自己評価作成日	平成28年5月19日	評価結果市町村受理日	平成28年7月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kai.gokensaku.jp
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 コスモブレイン		
所在地	島根県松江市上乃木7丁目9-16		
訪問調査日	平成28年6月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

私たちは、あした葉で共に生活するすべての利用者様とその家族の皆様の声に耳を傾けながら、心身ともに安心して生活して頂くため、医療機関との連携を図りながら日々努力をしています。職員も利用者様とゆったりとした穏やかな時間を一緒に過ごせることが一番だと思っています。また、看取り介護を実践してきた中で、利用者様が終末期にどのように過ごしたいか、どのように生活していきたいのかを、それぞれの立場で考えながら、常にその人らしく最後まで笑顔で過ごしていただけるよう支援をしています。その他、家族様との関係も確立出来ており、良好な人間関係作りが出来ている他、地域の皆様のご協力もいただき、火災・災害時の協力体制も出来ており、今後も地区住民の皆様と共に発展できるように努力していきたいと思っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

医療法人の経営で病院が隣接していることから、入所した時点ですでに重度な方が多く、平均年齢も介護度もかなり高い。健康状態の変化に素早く対応し、早く回復するように努め、又入院期間もできるだけ短くしている。そのため、入所者の健康状態が良好に保たれ、入所期間が長くなっており、そのことが経営の安定に繋がっている。看取りも多く経験しており現在の利用者家族からもその点での安心感が大きいことが伺える。市内外を含めて入所系の施設が増えたことから、今後の競争激化への危機感も感じており、利用料等の検討も視野に入れている。職員の中にも有資格者が多く、管理者を中心にモチベーションが高く、関わりを重視したケアには自信が感じられる。職員間のコミュニケーションを高める取り組みなどでチームワークも良く、そのことが離職率を下げている要因の1つと思われる。グループホームの集まりの中でも中心的な事業所となっており、注目度も高いことから、幅広い研修を行うことで、より質の高いケアに取り組んでいきたい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を玄関・居間に掲示し、常に意識できるようにしている。また、朝礼時に毎日唱和して、日々のケアに取り組んでいる。	開所時からの理念を継続しており、新規職員の採用時には時間をかけて説明を行っている。全体として職員の離職が少なく、経験年数もあるため考え方も一致し同一目線で介護にあたっている。時間のあるときに理念を唱和し、日々感じるようにしている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、緊急時の協力態勢も確立している。施設の行事にご近所の方を招待したり、地域の行事への参加も減ってはきているが可能な限り参加している。	自治会長、民生委員さん共に変わることがなく顔なじみのメンバー。緊急時の支援体制なども確立しており、事業所に地域の一員としての期待も高い。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小林医院外来での介護の相談があった場合など、適切なアドバイスができるようにしている。また、認知症の勉強会を開催し、地域の皆様にもご参加いただける様に計画している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者家族へ、毎回参加を呼びかけ、その都度現状の問題点を話し合い、サービスへの理解・協力をいただいている。特に重度化・看取りについて、機会があるごとに話し合っている。	地域関係者や包括、市などの行政関係者に加えて、多くの家族関係者の参加で定期に開催。法改正などの情報提供を行ったり、事業所への理解に繋がるよう、毎回議題を掲げて活発な意見交換が行われている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者及び包括支援センターとは、情報提供や相談の受付など必要な場面で都度連携に努めている。また、あした葉でのケアの取り組みを良く理解してもらい、協力関係ができていてと感じている。	市の担当者は異動が多く介護保険の内容等への理解が不十分に感じることはあるも、毎回運営推進委員会への参加は得ており、必要時には問い合わせなどいい関係が築けている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	居室には鍵はなく、玄関も日中は施錠をしない。研修をおこない、認知症による周辺症状をケアで緩和できるように検討・実践を重ねている。特に徘徊や帰宅願望が強いときは、いっしょに出かけることで、本人の思いを止めないように努めている。	身体拘束をしないケアを実践しており、外出要望の訴えない方もベッドの柵を工夫し事故に繋がらないようにしている。破壊行為など予期しにくい動きのある方も行動制限せず、見守り重視の対応としている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束の研修と絡めて、虐待は絶対にしてはいけないことを、常に意識しながら従事している。身体的虐待はもちろんであるが、言葉かけや態度など、虐待となり得る可能性のあることを学び、注意を払っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している利用者は現在いないが、権利擁護に対する研修の機会をつくり、専門職としての知識の習得に努め、適切な説明ができるように働きかけている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	申込みの時点で、施設見学をしてもらい、利用者の様子をご覧いただきながら、説明を重ね、十分に納得してもらうことに重点を置いている。また、制度改定時の説明や書面での同意なども、都度いただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会に来られた際に、必ず言葉を交わし、意見や要望を言いやすい雰囲気大切にしている。1ヶ月に1回、あした葉便りに合わせ、居室担当より1ヶ月のご様子をお知らせしている。	普段から面会が多く、その都度声がけし様子を伝え意見を聞くようにしている。定期的な通信に担当からの様子を伝える便り等、会議への家族関係者の参加も含め多くの機会で見聞を得るようにしている。	家族関係者同志が交流を持つ場であったり、より意見が出やすくなるような工夫等検討いただきたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎年度、昇給に合わせ、面接の機会をつくるなど、できるだけ、個々の意見を吸い上げるように努力している。なかなか全員ミーティングの機会がもてないが、定期的に飲み会を行い、話しやすい環境になるよう心かけている。	管理者に直接言いにくいことはリーダーを通して意見が伝わるようにしたり、できるだけ多くの職員の参加で交流する場をつくるようにして、日頃から話のしやすい関係を築くようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各自職員が昇給・賞与の自己評価の後、考課結果について、代表者に承認をいただく際に、第1にモチベーションを上げることが大切であることを、共通認識として、環境整備も努力してくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護従事者の資質向上のため、研修については、管理者に一任されており、毎年度、研修計画に基づき実践に努めている。また、資格取得についての、機会の確保や協力も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人外研修は、できるだけ多くの職員が参加できるように研修計画をたて出席させている。特にグループホーム部会での活動は、職員交流のため、研修会・懇親会等も重視している。		

自己	外部	項 目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面接での聞き取りを十分に行い、本人や家族の情報を、職員間で共有出来るように準備期間を置く。また、入居日に少しでも安心して頂ける様に、面接に同行した職員を配置するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学・申込み・契約や説明を重ねる時点での、得られた情報を最大限に活用し、利用者及び家族が望む生活を家族様と一緒に見守る関係づくりをめざしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の思いを汲み取り、必要に応じ他のサービスの情報提供や相談援助を行っている。緊急性がある場合は、ケアマネや他事業所と連携し、必要な情報の伝達やサービスの紹介等も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	相手の立場にたったケアを常にも実践できるよう、接遇研修や認知症研修を行っている。優しい言葉使いや声掛けを意識し、何でも話せる人間関係作りを心掛けている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族がいつでも面会可能な体制を取ると共に、日頃から情報交換をすることで、外出や外泊についても、家族が戸惑うことなく行えている。特に面会時は、大家族のように談笑できるような雰囲気作りができています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの店に行ったり墓参りに行ったり、古いお友達や町内会の人を訪ねて来られたりと、生活のあらゆる場面での関係が、家族を巻き込んで継続できるようにしている。	馴染みの方がいつ来られても、一緒にくつろげるように、ホールや廊下にテーブルとイスを置いてお茶を飲みながら話ができるようにしている。面会時に外出をしたり、定期的な集まりへの参加など継続していけるように家族との関わりを重視している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係はとても良く、孤立せず全員がホールで一緒に過ごしておられる時間が多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後、訪問できる環境ならば、面会に行くが、今現在の環境を崩さないことが第一の支援と考えている。但し、退所後の相談や遊びに来ていただける関係づくりは常に持てている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者との日々のコミュニケーションの中で得た情報を記録に残し、心の奥にある思いや希望を職員間で検討し、本人が望む支援を常に心掛けている。	今までの経験からも日頃の関わりの効果を職員全員が実感していることもあり、ケアの中で出てくる利用者の言葉や表情の変化を重要視し、個々のプランに取り上げている。	より残存能力を利用したプログラムの作成を検討いただきたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	相談開始期からの経過の記録や生活歴を活用すると共に、入居前には必ず面接を行い、本人が心地よいと思える生活環境やケア内容を検討している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者との日々のコミュニケーションや、健康状態を観察する中で、些細な変化も見逃さないように、職員間で連携を取り合い情報を共有し、特に残存機能や出来る事を奪わない事を重視している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の希望や本人の思い、その他の情報を元に、介護計画作成者が中心となり、今必要な事は何かを担当職員等と話し合い作成している。わかりやすく、出来ない事への支援ではなく出来る事への援助を重視している。	独自の介護計画書を作成しており、できることを1つずつ実行していき、モニタリングを重ねている。ケアの内容も実践できそうなわかりやすい表現になっており、本人を含めた家族関係者にも理解しやすい形になっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は、介護計画に直結したものと、本人の様子や健康面がわかるものと区別しており、それぞれに、見直しや比較ができるような工夫をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎週の教会への礼拝や家族との散歩外出など、本人や家族の要望を可能な限り対応している。また、急なデイサービスの利用拡大や延長など希望に合わせ取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者の高齢化や重度化により、外出できる利用者は減ったが、出来る限り地域の行事などに参加出来る機会を作るように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者や家族の希望に沿ったかかりつけ医の受診支援をしながら、法人の医師により、月2回の往診や適切な指導を受けている。	ここに入所した際に利便性などから殆どの方がかかりつけ医から法人の医師への変更を納得の上されている。定期的な往診に加え不調の際も速やかな診断を受けられる体制にある。眼科、整形、耳鼻科等他の病院受診も職員付き添いで出かけている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎朝のバイタルや特変時の状況等を、隣接した医院の看護師に報告し、専門職の指示を得て処置を行うなど、常に連携体制が得られている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	市内の総合病院の相談員とは、日頃の情報交換や、環境の変化で認知症がすすまないよう、早期退院ができるよう相談に努めている。特に骨折による入院では、手術後の抜糸が終われば、すぐに退院してもらうなどの対応をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在までに16名の看取りを経験した経緯から、終末期の在り方を、入居の段階で確認し、状況が変化していく中で、逐次家族や関係者との関わり方を検討している。また、急変時の連絡方法や対処方法についても十分に話し合いを行っている。	平均介護度が高く重度化しており、今年度も3人の看取りを実施。入所時点ですでに介護度の高い方もあるため、看取りの意向は担当者会議の場などで重ねて確認するようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ヒヤリハットや報告書の分析をし、その都度必ずカンファレンスを行い自分たちで出来る限りの事故防止策を考えている。また、感染予防に関する対応や急変時に備えた研修実施を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	いざという時に、スムーズに避難誘導や通報ができるように、年に数回、地域住民の方も参加して頂き避難訓練を実施している。地域の防災隊との定期的な話し合いや、火災時の協力体制も確立できている。	2階建てのため1階と2階では異なった避難の形をとっており、それに合わせて訓練を実施している。地域との連携も重視しており、近隣に独居の方も多い為一時的な避難場所にもなっている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	倫理研修や認知症のケア研修を重ね、人格やプライバシーを尊重したケアを心がけている。職員は常に相手の立場に立ち、自分だったらどう感じるかを援助の基本姿勢としている。	お便りに写真を載せることについて許可を得、各部屋のマークにも顔写真を出している。外に出る方もあるため了承を得て交番に名簿も提出しているが、情報の管理には注意することとしてる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	好きな箸を選ぶ、飲みたい飲み物を飲むなど、自己表出の難しい人でも、自己決定ができるような場面を多くもつように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	掃除等の業務を優先するのではなく、利用者の訴えや思いを最優先とするように、対応を心掛けている。大体の生活ペースを把握した上で、個々のニーズに適宜対応できるように配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴後に着る服を自分で選ぶ、毎朝、鏡の前で補整をしてもらう、化粧を継続するなどそれぞれできる支援をしている。季節ごとに衣料品の訪問販売業者にきてもらい、好きな買い物もできる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜を切る、混ぜる、味見する、配膳する、茶碗を洗う、拭くなど、常に一緒に行っている。職員も同じメニューでともに食事をしながら、楽しいひと時を過ごしている。もらいものも多いので都度変更したり追加したりと臨機応変に対応している。	重度の方が多くできる作業は限られるが、皮むきや下準備などできることを手伝ってもらうことで、臭いや、音からも感じるができるように3食、1階と2階で協力して作っている。筍の食材をもらうことも多いため利用して、副食を1品加えるようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	季節の野菜中心に、良質なたんぱく質をかかさないように、職員が献立をたてている。食事・水分の摂取量を記録し状態把握をしている。食事形態など、体調に応じた食事摂取ができるように配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事前の嚥下体操や嚥下訓練と毎食後の口腔ケアの実施を確実に行うことで、口から食べることの大切さを認識し、食事を楽しむことが継続してできている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	重度の方でも、排泄習慣や排泄パターンを把握して、日中は2人介助で、トイレでの座位の排泄を実施している。全介助の方も、朝はポータブルでの排泄を習慣にし、自然排便できるように気をつけている。	紙パンツやパットなど業者を招いて研修を行い、個人により適した物を不快感なく利用できるように工夫した。その結果、おむつ代をかなり減らすことができています。介助回数は増えてもトイレでの排泄を重視している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日1500ml以上の水分摂取を維持し、朝は牛乳・10時のおやつにはヨーグルトを毎日摂取してもらっている。十分な水分摂取が、排泄や精神安定、抵抗力に繋がることを活用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	その日の気分や希望に合わせた入浴を実施している。入居当初は入浴拒否があった方も、誘導方法や声掛け、入浴剤などを工夫することによって、問題なく入浴ができています。	重度な方が多い為特殊浴槽の利用が多くなっている。基本的に1対1の対応でゆっくり時間をかけており、歌を歌ったりと関わりを深める時間としている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自宅にいる時と同様に昼寝の習慣のある方は、好きなスペースで午睡してもらうようにしている。夜間寝付けられない場合も眠剤を使用することはせず、適切な対応を心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各利用者の介護記録と共に、処方箋をファイルし、効果や副作用・用法用量をいつでも確認できるようにしている。適切な服薬ができるように、配薬を工夫したり、飲み込みの悪い人は粉碎するなど医師・薬剤師との連携も十分できている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器拭きや洗濯物たたみなどの役割もってもらったり、書道の機会や絵や短歌をかいてもらったりと、個々の能力や楽しみに繋がるような援助を心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩やスーパーへの買い物に出かけたり、玄関前での日向ぼっこやお茶会をして過ごす。また、行事等に合わせ、地域の方との交流や外出などの機会も設けている。遠方の家族様が定期的に帰省され都度外出される事も多く、必要な支援ができています。	重度な方が多くみんなで出かけることはできないため、少人数や1対1で外出する機会を増やすようにしている。節目の行事として花見はできるだけ皆で行くようにしており、車の中からでも花が楽しめるようにしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物などの支援が必要な方は、小遣い預かりとして、必要な時、自由に使えるように管理している。ビールの購入や馴染みの魚屋での買い物など、可能な限り、支払いができるような支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望されるときは、自由に電話は使用可能にしている。あした葉便りに合わせ、本人の手紙を送ったりしている。携帯を持っている人も増え、継続して使えるように介護計画に反映させている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、写真や作品を貼るなどして過ごしやすい空間づくりに努めている。また、適切な温度や湿度管理を行うなどの配慮をしながら、天気の良い日は、玄関前で楽しめるように、プランターに季節の花が満開になるようにしている。	季節の野花を飾ったり、壁には作品を貼ったりして季節感を味わえるようにしている。幹線道路に近いが車の騒音も殆ど気にならない。街中で住宅や店舗が密集しておりあまり広さはないが、玄関前のわずかなスペースを利用して外気浴等楽しめるように工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	冬期はこたつで横になり、窓際でソファや椅子に座り談笑したり、いつでも本や新聞を読めるようにしたりと、いろいろな場所・場面での居心地の良い空間を工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や人形などを持ち込んでもらい、家族の写真や自宅の庭の写真、自分の作品などを飾り、自分の部屋を、居心地良く過ごせるように、家族と協力して取り組んでいる。	多くの方が日中の大半をフロアに出て過ごす為、部屋での時間は短いですが、家族写真や自分で作った作品などを飾ったりして、くつろげるようにしている。ベッドの配置も動線を考え事故に繋がらないように考えられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋やトイレがわからない人へ、わかるように明記したり、箸やコップなども、自分の物をとってもらったり、できることを奪わない支援の仕方をしている。		